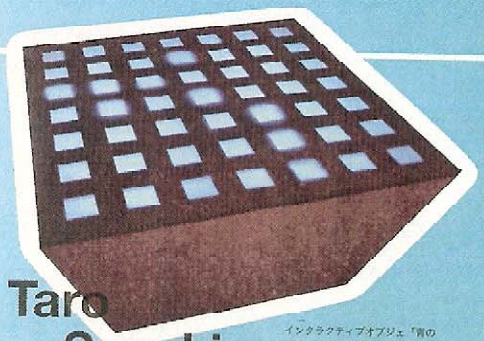
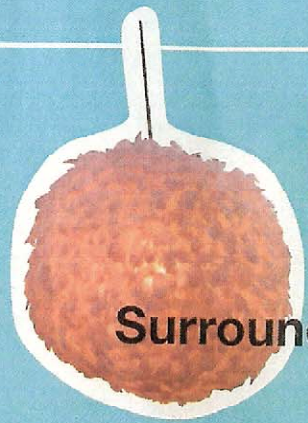


Taro Suzuki

インタラクティブオブジェ「青の軌跡」。人が近づくと、内部に仕込まれた約50個のプロペラが回転。その風によって発光し、上面を伝って幻想的な光が広がる。



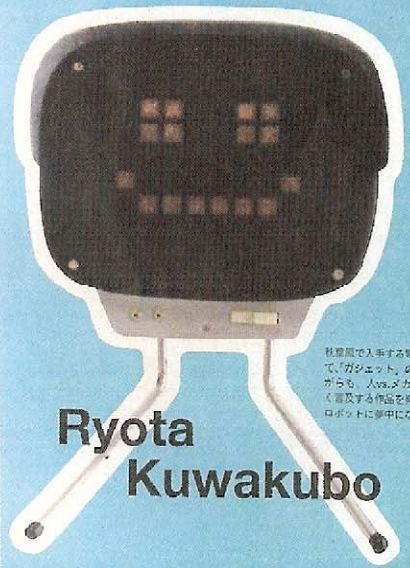
Surroundings

左が「呼吸をする」周明「Breathing」。上のソファは「Cafe Tools」。向き合って会話を始めると、ライトがトーンに合わせて伸縮。その振動がソファを通じて体へと伝わってくる。

© Chrispin Jones

Chrispin Jones

液晶里ウォッチ。本体のカラーは「ホメ上手」なメッセージを出す白と、「口の悪い」黒の2バージョン。お好みに合わせてどうぞ。photo_Andrew Powell



Ryota Kuwakubo

秋葉原で入手する電子部品を用いて、「ガジェット」の体裁をとりながらも、人vsメカの関係性に強く言及する作品を発表。愛らしいロボットに夢中になりそう？

知って、画面に心理状態をメッセージにして表示するという、いわばコミュニケーションツールだ。ほかにも各代表的な都市生活者のための、独創的な機能が付いたマルチファンクション・テーブルなど、新作にもぞっこん顧客。

さらにこれらを実体験できる、必見の展覧会を自由律した。まさに開催中の"バンクアート・ファン"展（1）には、サラウンディングス、鈴木太朗、クリスピン・ジョーンズの新作が登場。クワクボリョウタが新作を出品する"アートとテクノロジーの歴史と未来"展（2）では、戦後からのメディアアートの歴史をたどることができる。さらに2006年2月には、世界のインタラクティブアーティストが大集合する"エレクトロニック・ファンタジスタ"展（3）が開催予定。ますますヒートアップするメディアアート、今後も目が離せません。

text_Sayoko Nakahara
photo_Tomoniro Okada (Creative Cluster)

(1) 12月18日まで開催中。BankART 1929 Yokohama。(2) 12月25日まで開催中。NTT インターコミュニケーションセンター☎0120-144-199。(3) 2006年2月3日～2月26日（予定）。BankART NYK Studio。※1. 3の問合せはクリエイティブ・クラスター（☎03-5219-0112、http://creativecluster.jp）へ。

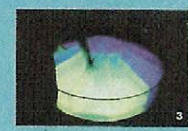
Ultra Modern Interior

メディアアートは、インテリアに急接近中です。

テクノロジーを駆使したメディアアートから、インタラクティブなインテリアが誕生しています。ここでは、今注目の5作家をノイーチャー。

fuwa pica

誰も座っていなければ白。1人座るとパープル、もう1人座るとピンクに…。ファンタスティック！



1 前作品の「fuwa pica」。2「honeycomb」は六角形のユニットを自由に組み合わせ可能。3「fuwa pica」の進化形「fuwa pica sofa」。光源はLED。4 宮城県の感覚ミュージアムにおける常設展示「air wall」。

人間の言動に反応するインテリアがあったら？　さらには会話ができたら？　そんな夢のような話をすべてかなえるテクノロジーが今、あちこちで進行中。エレクトロニクスやITを駆使したメディアアートが、インテリアの分野に急接近中なのだ。

まずは、座ると光るエアソファ。八木澤俊匡と松山真也、2人のアーティストによるユニット「ふわかが」が開発したシリーズで、その名のとおりプレッシャーをかけると、その位置や力具合によって気体の色が七変化する。ITの極みというのに、柔らかい感じというか、座った瞬間、何とも安らいだ気分に包まれてしまうフワモノだ。

慶応義塾大学SFCにおけるプロジェクトグループ"サスペンディングス"は、まるで生き物のような照明を手がけている。人が近づくと点灯し、呼吸をするかのようにぼんやりしぼんだり。さらに人の声に反応して動きが変化するという、不思議な感覚を味わえる。このライトの応用バージョンには、会話のトーンを模倣して体感できるリビングソファもあり。

続いては、幻想的な青い光を用いたインスタレーションによって、現代アート界でも活躍の鈴木太朗・ヤンリーで作品に影響った人々を感知し、幾重りもの美しい光を発するオブジェで、多くの観客を魅了してきた。その最新作は、発光ダイオードを用いたモジュールを埋め込んだ、インタラクティブなフロア。こんな床のある家があったら、さぞかし感性が磨かれ、豊かな生活を送ることだろう。

相手の声のトーンから想像される感情をマネて、大きなドット画のキャラクターがおしゃべりするという、TV電話にも注目したい。これを作ったのは、コンパイス・アーティスト」を標榜するクワクボリョウタ。ある意味、ローテクなツールで、デジタルなのに妙にアナログ的というべきか、独特の温度感のある作品だ。

ロンドン生まれのインタラクティブデザイナー、クリスピン・ジョーンズは先頃、デジタルウォッチ・シリーズを引っさげて来日。持ち主の挙動を察